北海道方言ラサル接尾辞の自動詞への接続とその使用コンテクスト

七条 乙衣（津田塾大学大学院　修士課程）

1.　はじめに

北海道方言の文法的特徴の一つとして、基体動詞に接尾辞ラサル（以下、ラサル接尾辞）を接続して自発の意味を導出する、ラサル構文という構文が存在する。(1) を見てみよう。

(1)　a. ドを弾こうとしたら、レが弾かさった。
　　＝ドを弾こうとしたのに、レを弾いてしまった。[1]
　　（円山 2016: 245 筆者による訳の追加）

　　b. お風呂が沸かさったよ。
　　＝お風呂が沸いたよ。
　　（円山 2016: 262 筆者による訳の追加）

　　c. あいつの後付いて行ったら走らさっちゃう。[2]
　　＝あいつの後をついていったら、走らざるを得なくなる。
　　（山崎 1994: 231 筆者による訳の追加）

ラサル接尾辞は他動詞との接続が多く見られる傾向にあるが、(1) から分かるように、ラサル接尾辞は他動詞と自動詞の両方に接続し、自動詞のなかでも非対格動詞・非能格動詞の両クラスへの接続が可能である。これまでに、先行研究では自動詞にラサル接尾辞が接続された用例を取り扱っているが（山崎 1994、円山 2016、佐々木 2015）、ラサル接尾辞が接続できる自動詞について詳細な調査はされていない。

本研究では、自動詞を非対格自動詞と非能格自動詞の 2 つのクラスに分け、ラサル接尾辞が接続して自発の意味を導出できる自動詞をより詳細に調査する。そのために、北海道方言話者への容認性判断課題を行う。この容認判断課題では、自発の意味が導出されるか否かに限らず、自発の意味が導出されるコンテクストも調べることとする。

2.　容認性判断課題

2.1 被験者

調査時点での被験者の年齢は 19 歳から 70 歳となっており、最も多い年齢層は 20 代であった。全ての被験者は生まれてから 18 歳になるまで北海道に居住している。何人かの被験者は調査時に北海道に居住していなかったが、18 歳までは少なくとも北海道に住んでいたことと、調査時点で最も居住歴が長い場所が北海道であったことが確認されている。尚、本研究では北海道のどの地域に住んでいたかは考慮していない。

被験者の人数は、それぞれ非能格自動詞で 10 人・非対格自動詞で 8 人となっている。動詞クラス間で被験者の人数が異なっているが、容認性判断課題では被験者個人の判断を調べているため、結果において支障は出ていなかった。

2.2 動詞の選出

動詞の選出にあたって、非能格自動詞と非対格自動詞を区別するために、以下にある四つのテ

---

[1] 標準語の「～ちゃった」とラサル構文は厳密には異なるニュアンスがあるが、ここではその差には立ち入らない。

[2] 用例で使われている漢字などは、全て原文ママとする。

ストを行った。

(2) 非能格自動詞・非対格自動詞を区別する四つのテスト（影山 1993）
a. 数量詞「たくさん」の解釈
b. 非対格主語のガ格省略
c. 間接受身
d. 使役受身

非能格自動詞は、当初は影山 (1996) と筆者の内省に基づいて 25 個選出されたが、(2) の 4 つのテストと筆者の内省に基づいて非能格自動詞として不適切だとみなされた 8 個の動詞が除外されたため、最終的には 17 個選出された。影山 (1996) では英語の非能格自動詞が一覧で提示されていたので、筆者が各動詞を和訳した。非対格自動詞については、影山 (1993) で提示されていたものから 17 個選出した。選出された動詞は以下の通りである。

(3) a. 非能格自動詞
歩く、働く、話す、笑う、微笑む、泳ぐ、踊る、戦う、泣く、囁く、叫ぶ、吠える、怒鳴る、走る、遊ぶ、くしゃみする、しゃっくりする（計 17 個）
b. 非対格自動詞
暴発する、転倒する、墜落する、産まれる、壊れる、起こる、沸く、開く（あく）、爆発する、漏れる、腐る、蒸発する、脱落する、逸れる、取れる、折れる、出る（計 17 個）

2.3 調査方法

この容認性判断課題は、被験者一人一人に対して口頭で行われた。それぞれの被験者が自らの内省に基づいて提示された動詞にラサル接尾辞を接続させた状態で、「容認できるか」と「自発の意味が導出されるか」を判断した。筆者は被験者が容認性判断をする際にいくつかのコンテクストを提示しおり、コンテクストは、被験者によって想定しやすいものに適宜変更した。被験者側から、自発の意味を導出しやすいコンテクストが提示された場合には、そのコンテクストを結果として記録した。

尚、被験者一人あたりの容認性判断課題に要した時間は平均で約 1～2 時間程度であった。

2.4 結果

結果はそれぞれ、非能格自動詞は表 1、非対格自動詞は表 2 にまとめている。表の左側記されている動詞はラサル接尾辞が接続した形となっている。動詞の下にある数字は、ラサル接尾辞の接続を容認した被験者の人数を示している。例えば、10 人中 8 人の被験者がラサル接尾辞の接続を容認した場合、「8/10」と記録されている。表の右側には、自発の意味を導出できるコンテクストや例文が記載されている。数人の被験者によって類似したコンテクストが挙げられていた場合には筆者の方でまとめて記載した。

表 1（非能格自動詞）

動詞	コンテクスト
1.　歩かさる （8/10）	●　景色がきれい、気持ちが良いなど周りの状況に影響されて歩きたくなった時に言える。（「普段ならあまり歩きたいと思わないが。」のような前提があると尚、分かりやすい。） ●　すごく強い力で手を引かれたとき ●　押されたとき ●　空港などの動く歩道にいるとき ●　風が強く吹いているとき ●　バスを一本逃してしまい、歩くしかなかったとき ※自分の意思（目標地点が決まっている、目的が決まっている時など）で歩こうと思う時には「歩かさる」は言わない。
2.　働かさる （10/10）	●　仕事量が多いとき ●　仕事が終わらないとき ●　機械のようなものが、動き出したとき
3.　話ささる （8/10）	●　大阪の人や英語話者などに囲まれているとき
4.　笑わさる （8/10）	●　こらえていても、面白くてこらえきれずに笑ってしまうとき ●　静かな場所で面白いことがあったとき ●　笑ってはいけない状況にいるとき ●　何度も笑ってしまうとき
5.　微笑まさる[3] （8/10）	●　小さな子供を見て可愛らしく思ったとき
6.　泳がさる[4] （7/10）	●　「溺れている・波に飲まれそう」などの緊急事態（外的・物理的要因があると意味を捉えやすい） ●　普段泳がない人などが海を見て泳ぎたくなったとき
7.　踊らさる （10/10）	●　曲が流れて来とき（好きな曲・沢山練習した曲だったなど） ●　飛び上がるほど嬉しかったとき ●　人間ではなく、操り人形などが操られているとき ●　踊るべきではないのに踊ってしまうとき（体力を温存しないといけない、踊ってはいけない場所など） ●　物理的に身体が勝手に動くとき（手を引っ張られるなど） ●　ダンサーとかなら言っていそう ●　いわゆるダンスの意味だけでなく、「手のひらで踊らされた」のような意味のとき
8.　戦わさる （8/10）	●　ゲームなどで敵と対峙したとき ●　操られているとき ●　腹が立ってつい手が出たとき ●　ギャンブルでお金をつぎ込みたくなったとき ●　簡単には勝てなさそうなとき ●　簡単に勝てそうなとき
9.　泣かさる （10/10）	●　本や人の話に感動したとき ●　悲しい場面を見たとき ●　殴られるなどの物理的な要因があったとき
10.　囁かさる （7/10）	●　普段声が大きい人が小さい声で話したとき ●　噂話をするとき

[3] 少し引っかかりを覚える被験者も多かった。

[4] ふざけて、わざとおかしな言葉遣いをするときになら容認できるかもしれないという話者もいた。

	● 美術館などの静かにしなくちゃいけない場所にいるとき
11. 叫ばさる （7/10）	● 危険とき ● 驚かされたとき ● ジェットコースターに乗っているとき
12. 吠えらさる （4/10）	● 犬が主語になっているとき
13. 怒鳴らさる （9/10）	● すごく悪い事をしているのを目撃したとき ● 外的要因があればなお良い。 ● 「あいつの行動を見てるとつい怒鳴らさる。」の例文
14. 走らさる （10/10）	● 前の人（隣の人）は歩くのが速くて、追わなければいけないとき ● 手を強く引っ張られたとき ● トレーニングマシンのようなものを使っているとき ● 自分以外の周りの人々が一斉に走ったとき ● バスや電車に乗り遅れそうなとき ● 遅刻しそうなとき
15. 遊ばさる （8/10）	● 遊んではいけないような状況で楽しいこととかを見たとき ● 友達と勉強していたらつい遊んでしまったとき ● ゲームがしたくてたまらないとき
16. くしゃみしらさる （9/10）	● しないように我慢しなければならないとき ● 花粉を吸ったとき
17. しゃっくりしらさる （5/10）	● 炭酸を飲み過ぎたとき

表 2（非対格自動詞）

動詞	コンテクスト
1. 暴発しらさる （8/8）	● ゲームなどで銃が撃たれているとき ● 不注意の事故が起きたとき
2. 転倒しらさる （8/8）	● キャスター付きの台を押していて、石に躓いたとき ● 誰かが転んだのを見たとき ● 躓いてしまったとき ● 何かの外力がかかったとき ● 滑りやすい路面について話しているとき ※転んでいる最中の状況を見ていたとしたら、「転倒しそう」の意味になる
3. 墜落しらさる （8/8）	● 突風が吹いてドローン、ラジコンが落ちたとき ● 飛行機に整備不良があったとき
4. 産まれらさる （6/8）	● なかなか子どもを生めなかった牛や馬などが、子どもを産めるようになったなどのコンテクスト（主語が犬などの動物なら分かりやすい） ● 「卵から産まれる」「ゲームとかアニメなどのように何もない所から産まれる」のコンテクスト？ ● 卵を孵化させるつもりなかったのに孵化してしまったとき
5. 壊れらさる （7/8）	● 手が触れていないのに壊れてしまったとき ● ちょっと触って壊れてしまったとき ● 経年劣化により壊れたとき ● 誰かがぶつかって壊れたとき ● ぬいぐるみを引っ張っていて、千切れてしまったとき
6. 起こらさる	● 凍って滑りやすくなっている路面で事故があったとき

(8/8)	● 実際に事故が起きていない際に、注意喚起されているとき
7. 沸かさる (7/8)	● 目を話しているすきにいつの間にかお湯が沸いたとき ● 沸騰する前にお湯を止めたかったのに、沸騰してしまったとき ※声のトーンによって「自発」の意味になる。 ※「～ちゃった」まで付くと「自発」の意味になる。
8. 開かさる (8/8)	● 鍵が壊れてドアが開いてしまったとき ● リュックなどが当たって扉が開いてしまったとき ● 風など、ドアが開いた原因がわからないとき ● ドアが自動ドアのとき ● 気圧でドアが開いたとき ● 片方のドアを閉めたらもう一方のドアが開いたとき
9. 爆発しらさる[5] (8/8)	● 爆弾のボタンだと知らずに押してしまったとき ● 着火の紐を引っ張ってしまったとき ● 爆弾にたばこの火が移ったとき ● 何かの火がついてしまったとき ● 周りの気温が高すぎたことで着火したとき ● 「怒りが爆発する」などの意味のとき
10. 漏れらさる (7/8)	● 赤ちゃんが主語になっているとき（おねしょなど） ● ちゃんと蛇口が閉まっていなくて水が漏れているとき ● どこかの部分が壊れていて水が漏れているとき ● 水道管が古いとき
11. 腐らさる (7/8)	● 冷蔵庫に入れていたのに食べ物が腐ってしまったとき ● 放っておいた結果、勝手に腐ってしまったとき ● もうちょっと、腐らずにもつだろうと思っていたものが腐ってしまったとき ● 暑い中放っておいたら、野菜が腐ってしまったとき
12. 蒸発しらさる (7/8)	● 気温が高い日などに外に水置いておいたとき（打ち水など） ● 水やペットボトルなどがまだ蒸発しないだろうと思っていたとき
13. 脱落しらさる (7/8)	● その人自身も相当強いが対戦相手が強かったとき ● 対戦相手が予想以上に強かったとき ● 予期していない攻撃があったとき
14. 逸れらさる (8/8)	● 銃弾が狙った方向から逸れたとき ● 話が逸れたとき
15. 取れらさる[6] (7/8)	● 何かをつないでいた紐の結び目が緩かった、もしくはボロボロになっているとき ● ねじが落ちていて、どこからねじが取れたか分からないとき ● 取れかけの葉っぱに手が触れたとき ● ご飯が美味しくて、何度もおかわりしてしまうとき ● 取れてほしくないものが取れたとき
16. 折れらさる[7] (7/8)	● 木の枝が折れたとき ● ショッキングな出来事があったときに「心が折れる」の意味があるとき ● もう少しで折れそうな枝に手が触れたとき

[5] 「～ちゃう」の意味は出るが、「意図していなかったのに」までは感じないという被験者が 1 名いた。
[6] 考えたら容認できる程度の容認度の被検者が 1 名いた。
[7] 考えたら容認できる程度の容認度の被検者が 1 名いた。

	● 折れてほしくなかったのに折れてしまったとき
17. 出らさる (7/8)	● 蛇口にぶつかって水が出てしまったとき ● 後ろから驚かされて声が出たとき ● 調味料などが余分な量出てしまったとき

8 割以上の被験者によって「ラサル接尾辞の接続が容認され、且つ自発の意味が出る」と判断された動詞は、それぞれ非能格自動詞では 12 個、非対格自動詞では 15 個あった。非能格自動詞・非対格自動詞の両クラスにおいて 7 割の動詞がラサル接尾辞の接続が容認され、自発の意味が導出されたことが確認された。

2.5 考察

コンテクストの傾向について詳細に見ていこう。多くの動詞で、自発の意味が導出されるコンテクストは何らかの外的要因が含まれていることがわかる。「天気が良くて気持ちが良いから」「海を見て泳ぎたくなって」という心理的な部分からくる、話者にとっての内的要因がコンテクストとして想定する被験者もいたが、数としては少なかった。「手を強く引っ張られて歩かさった」や「リュックがあたってドアが開かさった」のように、物理的なきっかけや周囲の環境によるきっかけがないと自発の意味を想定しにくいと回答した被験者の方が圧倒的に多く、主に 20 代の若い世代においてその傾向はみられた。加えて、それらの外的要因は各行為を行わせるにあたって、強制力があるものである。つまり、外的要因によって、各行為を行う動作主は「その行為をせざるを得ない」状況になる。したがって、ラサル接尾辞によって自発の意味が導出されるためには、外的要因が含まれたコンテクストが必要であることが窺える。

本結果のなかで興味深い部分として、非能格自動詞にも外的要因をコンテクストとして想定して自発の意味を導出させることができることが挙げられる。非能格自動詞ではその動詞の特性上、「歩く」「走る」「働く」などの行為は必ず動作主によって意図的に行われているため、本来、非能格自動詞では自発の意味は導出されない。ラサル接尾辞が接続した場合でも動作主によって動作が行われているということは変わらない。例えば、(1c) の「走らさる」は「走る」という動作は動作主によって行われていることは想像に難くない。しかし、ラサル接尾辞が接続した場合、何らかの外的要因をコンテクストとして想定することができ、その結果として自発の意味を導出することが可能となる。これはラサル接尾辞そのものが「非意図性」の意味をもっているが故に起こっている現象なのかもしれないが、本稿ではその部分については詳しく立ち入らない。重要なのは、本来は自発の意味を導出することができない非能格自動詞であっても、ラサル接尾辞の接続が容認され、外的要因をコンテクストとして想定して自発の意味を導出できるという部分である。

その一方で、多くの動詞が自発の意味を導出しているなかで、以下の動詞については自発の意味が認められない、もしくは認められにくいと判断した被験者がいた。

(4) 墜落しらさる、壊れらさる、沸かさる、腐らさる、蒸発しらさる、脱落しらさる

(4) の動詞は全て非対格自動詞である。また、これらの動詞のなかでも特に「墜落しらさる」「壊れらさる」「沸かさる」の 3 つの動詞については自発の意味よりも結果状態の解釈がされた場合もあった。非対格自動詞に観察される結果状態の解釈は、先行研究で言及されているなかでは「非情物に出現する結果の状態」（山崎 1994）や「事態実現用法」（円山 2016）と一致している。

非対格自動詞において、そもそも自発の意味が導出されにくいと判断されるのは、非対格自動詞が動作主の動作ではなく対象の状態変化を描写しており、動作主性が含まれていないことが原因であると考えられる。言い換えると、非対格自動詞によって描写されている事態において、動

作主は意味的に抑制されているのである。特に、今回調査した非対格自動詞のなかに多く含まれている-e 形自動詞には、その傾向がみられる。「取れる」「折れる」などの-e 形自動詞は、基体動詞となる「折る」「取る」などの他動詞に-e の接尾辞をつけることで派生されており、このような派生は反使役化とよばれている（影山 1996）。-e 形自動詞の派生にあたって、次のような語彙概念構造上の操作が反使役化に関与していると、影山は述べている。

(5) [x CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]] (x≠y) （他動詞）
→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]] （自動詞）

（影山 1996: 146, 196）

(5) の語彙概念構造において、 x は状態変化を引き起こす使役主、 y は状態変化を受ける変化対象である。変化対象が自身の性質として状態変化を起こすことができる場合、使役主と変化対象は同一物であるとみなされ、語彙概念構造上で同定される。以下の例文で考えてみよう。

(6) 花瓶を壊す。
→花瓶が壊れる。

「壊れる」は本調査でも使用した動詞であり、自発の意味が認められなかった動詞である。影山 (1996) の分析に則って説明すると、変化対象である「花瓶」は「壊れた状態」になることができる性質をもっている。そのため、「花瓶」は自らを、状態変化を引き起こす使役主と同定して自動詞を派生することができる。結果として動作主は意味的に抑制されている。本調査で使用した非対格自動詞は (5) の語彙概念構造上の操作によって派生されているといえる。元々、変化対象となるものと状態変化を引き起こす動作を行う動作主が同定されて意味的に抑制されていることで、ラサル接尾辞が接続したあとにおいても被験者にとって非意図性が感じ取りにくくなったことが予想される。その結果として、自発の意味が導出されにくいという判断や、結果状態の解釈が導出されたと考えられる。しかし、被験者間での差があったとはいえ、ほとんどの非対格自動詞において自発の意味で解釈されたということは、やはりラサル接尾辞によって自発の意味が新たに導出されたということを表しているといえる。

3. おわりに

本研究では、容認性判断課題を通して「ラサル接尾辞が非能格自動詞・非対格自動詞に接続できるのか」「自発の意味が導出されるのか」の主な 2 点について調査を行った。その際に、「どのようなコンテクストにおいて自発の意味が導出されるか」についても調査を行った。結果として、外的な要因をコンテクストとして想定した場合、自発の意味が導出されやすい傾向にあることがわかった。

最後に、本研究において行われた容認性判断課題の問題について言及する。まず 1 つめに、日常会話のなかで使用頻度が低い動詞が判断対象となっていたことである。「転倒する」「墜落する」などは、日常会話のなかで使用する頻度はかなり低い。そのため、容認性を判断するにあたって頭を悩ませていた被験者も数多く見られた。加えて、「転倒する」であれば「転ぶ」などにすることで容認性が上がった被験者もいたため、動詞の選出に課題があった。2 つめは、コンテクストが被験者間で統一されていなかったことである。本稿の冒頭に筆者が提示するコンテクストは被験者によって適宜変更したと述べたが、理想は同じコンテクストを与えられた状態で容認性と自発の意味の導出を判断できるのが望ましい。もし、このような形式で容認性判断課題を行った場合、自発の意味が導出されるコンテクストと導出されないコンテクストをより鮮明に区分できる可能性がある。もちろん、被験者側から提示された場合にはそのコンテクストを優先するべき

だと思うが、今後、同様に容認性判断課題を行っていく場合にはコンテクストを統一させた状態で被験者に判断を仰いでいくことも検討していくべきであろう。

＜参考文献＞

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
影山太郎 (1996) 『動詞意味論』東京: くろしお出版.
円山拓子 (2016) 『韓国語 cita と北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』東京: ひつじ書房.
佐々木冠 (2015) 「第 4 章　北海道方言における形態的逆使役の類型的位置づけ」山梨正明・吉村公宏・堀江薫・籾山洋介（編）『認知類型論』163-211. 東京: くろしお出版.
山崎哲永 (1994) 「北海道方言における自発の助動詞-rasaru の用法とその意味分析」小野米一（編）『北海道方言研究会 20 周年記念論文集 ことばの世界』227-237. 北海道: 北海道方言研究会.